

#### 第4話 (3頁) おじいさんと孫

おじいさんが年をとってしまいました。あるとき、ペチカ\*にはいあがろうとして、そうできないことがありました。孫がうちにいました。孫はおかしくて笑いたくなってしまいました。はずかしいことです。いけないのは、おじいさんが年をとって弱くなったことではありません。いけないのは孫が小さくて、考えが足りないことです。

\*ペチカ…ロシアのだんろ。その上にねることができる

「えっ、どうして？ って、思わず首をかしげてしまった。『はずかしいこと』『いけないのは』と、したことへの評価を下す単語が二つも出てくるんだから。」

「アーズブカでは、いいとか悪いとかあえて書かないようにしていると、みんなで確認し合ったばかりなのに、ね。」

「それも、二つとも、子どもの行為を戒めるマイナス評価の言葉なんだ。」

「作者のトルストイが前面に出てきて、はっきりとたしなめている。こういうのは、やっぱり例外中の例外だよ。本文中で評価はしないという原則は崩れるわけじゃないよ。」

「それを前提に話を進めるとして、ペチカにはいあがろうとしてできなかったおじいさんを、孫がおかしくて笑ったことを、トルストイは口を酸っぱくしてののしっている。弱い立場の人をいたわる、思いやることが大事だと訴えたかったのか。」

「それじゃ、あまりにも道徳的だ。」

「孫が小さくて考えが足りなかったことがいけなかったと…。小さくても自分できちんと考えれば、おじいさんの置かれた状況というか、年をとれば体の自由も効かなくなることぐらい、想像で分かるはずだと、そういうメッセージであることは誰も誤解しようがない。」

「はっきりしているだけ、この話は、悪いけど面白みがない。読んだ子どもたちにも、考える余地は全く与えられていない。」

「なんだが、みんなの評判は、いま一つだ。確かに、含蓄は感じられない、ね。」

「おじいさんと孫、ではなくて、もし、一人のお年寄りと子どもだったとしたら、筋書きも変わっただろうか。」

「うーん、変わらないだろうな。そういう設定の問題じゃない気がする。」

「子どものころから、自分の頭で考え、行動することが大切だ、というメッセージを送りたかったのだと考えたら、十分に理解できるけどなあ。」